

2022年3月13日（日）「養育係からの解放」

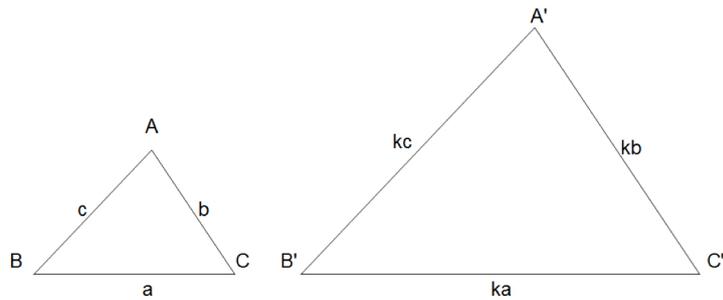
ガラテヤ 3:23-25

23 真実が現れる前は、私たちは律法の下で監視され、閉じ込められていました。やがて真実が啓示されるためです。24 こうして律法は、私たちをキリストに導く養育係となりました。私たちが真実によって義とされるためです。25 しかし、真実が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。

【序論】

今日はテキストを立体的に理解していくことを目指し、初めに数学における「相似」にふれておきたいと思います。「相似」の定義：「2つの図形FとGが相似であるとは、一方を適当に点スケール変換して他方と合同になること」。もっと簡単に言えば「それらの『形』が等しいこと」です (Wikipedia)。

このイメージを持って、パウロが伝えようとしている「救い」の真理を読み取ってまいりましょう。パウロにおける「救い」の見方には、「個



人レベル」と「世界レベル」の二つの領域があると思われます。人がその人生のどこかで神と出会い、救われる。これは「個人レベル」の出来事であり、私たちが目の当たりにすることです。人の人生には罪に支配された暗黒の時代があり、そのところから救い出してくださる神の恵みと、そこから始まる光の支配下に置き直された新しい人生があります。これは私たちの人生に介入してくる神の御業ですが、パウロはそのようなことが実際に起こりうることを認めながら、同時にはるかに大きな文脈上でもこれを見ているのです。すなわち、神がこの歴史に対してなされた救済の出来事に照らして、人の救いを理解している。そこには、人が律法の支配下にあった時代と、そこから解放してくださったイエス・キリストの恵みが現れた時代がある。歴史上に起きたことが個人の人生における出来事ともなる。このように、パウロの念頭には「個人的救済」と「世界的救済」が常に相似的関係にあると言えるでしょう。

【本論】

本論 1. 信仰／真実

真実が現れる前は、私たちは律法の下で監視され、閉じ込められていました。やがて真実が啓示されるためです。(3:23)

まず、「真実が現れる前」とありますが、私はここでなぜ「真実」という訳語が採用されたのか、考えなくてはなりません。と申しますのは、原文では基本的に「信仰」を意味する「πίστις／ピスティス」という語が用いられており、従来の翻訳のどれを見ても「真実」とは訳されていないからです¹。訳者の意図を理解するためには、「πίστις」が誰に属するものであるかに重点が置かれたと考える必要があるでしょう。「信仰」と言った場合、それはイメージ的に「信じる側」、すなわち人間の内側から出てくるもののように感じられるのですが、ここで「πίστις」は人間の外側からやってきたものとして「現れた」と言われているのです。そのため、「神に属する『πίστις』」として、「神の真実」「キリストの真実」というニュアンスを出したかったのだと思います。そもそも私たちの内に「真実」がないのであれば、本当に「真実」を持っている方によってもたらされなくてはなりません。

パウロは、罪人の生き方が「律法の下で監視され」ていたと言います。律法は、出エジプト後、40年の荒野での生活の中で神がイスラエルの民に与えたものです。律法がまだ与えられていなかった時代、それは生き方の基準がなかったということですから、民は何に従って生きていけばよいか分からない状態にあった。いわゆる「無法地帯」であり、罪の基準、裁きの基準が定められていない状態でありました。野放しにされた人間は、どこまでも欲望のままに生きるようになるでしょう。そこで、神の民が本来あるべき倫理基準が与えられる必要がありました。

主はモーセを通して律法を与え、生き方の指針を示してくださいました。国家をはじめとする大小さまざまな社会には「ルール」がありますが、それは問題が生じたときに対応できるようにしておくため、あるいは問題を未然に防ぐためとも言えます。法を破ったときに課せられるペナルティが定められていることによって、人間の心にはブレーキがかかるのです。しかし、その一方では常に法の抜け穴探しが行なわれており、監視

¹ 日本語訳で確認できる範囲で「信仰」と訳されているものは、文語訳、口語訳、新共同訳、新改訳、塚本訳など。

の目を盗んで事を行なうということが必ず起きてくる。これが人間の性質であって、神の法の本来の役割を狂わせてしまった部分と言えるでしょう。

神は本来、ご自身の民の幸せを願って聖なる律法をお与えになったのですが、民にとってそれは、自分たちの生活をギュッと規制してくる窮屈なものとなりました。常に睨まれ、「ちゃんとやっているか?」「規則を破っていないか?」と見張られた閉塞感の下に生きるようになってしまったのです。なぜこのような錯誤が生じたかという、それは人間に罪があるからではないでしょうか。パウロはこのことを「(律法の下に) 閉じ込められた状態」と表現しています。

本論 2. 養育係としての律法

こうして律法は、私たちがキリストに導く養育係となりました。私たちが真実によって義とされるためです。(3:24)

さて、ここに出てくる興味深い言葉に注目しましょう。パウロは律法の役目を「養育係」という言葉で表しています。原文では「παιδαγωγός/パイダゴゴス」という語が使われており、KJV などでは「schoolmaster」と訳されています。私はこれまで、この言葉を「養育者が子どもに生き方の指針を示してくれる羅針盤のような役割を果たしてくれるもの」という肯定的な意味で理解してきたのですが、実際にこの箇所を学び、この時代の「養育係」の役割を知ったときに、読み方がひっくり返ってしまいました。古代ギリシャ・ローマ社会における裕福な家の子どもには、6～16歳くらいの時代に「養育係」が付けられ、生活を監督したり学校に着いて行ったりしていたようです。このような立場に^{ぼってき}抜擢されるのは、奴隷としてその家に仕えている人でありましたが、「奴隷」と言いましても社会的地位が低かったわけではありません。しっかりと給料をもらって、ご主人様のご息が悪事を働くことのないよう、常に見張る役割を担っていたのです。日本のドラマでも、良家の坊ちゃんや嬢ちゃんに「お付き」がくっついているのを見ることがあるでしょう。そんなイメージであり、子どもたちにとっては少々面倒臭い存在です。いつも見られていると、自分の好きにできないからです。

パウロは、律法とは神の民にとって、この「面倒臭い存在」にほかならなかったと言うのです。人々は喜んでこれに聞き従っているのではない。決められているから仕方なく従っているのだ。そこには喜びがなく、自分の過ちを見つけ出しては罪を裁くものでしかない。人に生き生きとした神との関係を与えることはできず、「義務」として従わなくてはならないものであったと言うのです。

この翻訳で誤解を与えてしまうのではないかと感じるころは、「キリストに導く養育係」と訳されている点です。原文では「キリストへの養育係」となっており、「導く」は補足です。しかし、この補足は「養育係」が良い役割を果たしているかのようなイメージを与えてしまうものであり、パウロの本来の意図とのズレを感じざるを得ません。むしろ、律法はキリストが来られるまでの期間、民の生活を規制し続けていたものであったとパウロは言いたいのです。

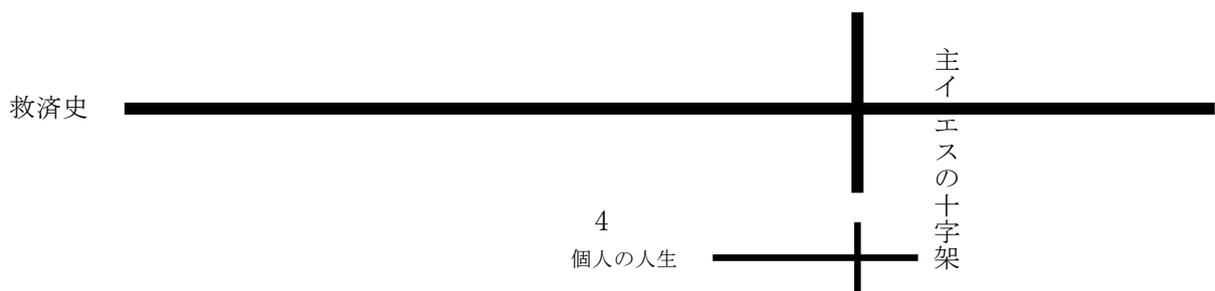
本論3. 養育係からの解放

しかし、真実が現れたので、私たちはもはや養育係の下にはいません。(3:25)

ここでの「真実が現れたので」という部分は、「キリストが来られたので」と言い換えてもよいでしょう。主イエスが来られ、罪の赦しを与えてくださったのであれば、もはや律法の基準に自分を照らして「ダメだ」「できていない」というネガティブな自己イメージを持たなくてよくなったのです。むしろ、主イエスが私たちに代わって神が要求する義の基準を満たし、しかもその義を私たちに着せてくださったのですから、私たちは常に神の御前に百点満点の存在とされているのです。神は律法によって私たちに裁くことはなさらず、まったく新しい親子の関係を求めてくださっている。私たちががんばって点数稼ぎをしなくては神の子になれないではありません。もうその身分は与えられてしまったのです。

かつて罪人の生活を規制していた律法の役割は終わり、養育係の監視はなくなりました。パウロがこのイメージをもって説明するところには、おそらく17歳になって養育係が解任されたときの開放感を知っていたからでしょう。パウロ自身もローマの市民権を持つエリート階級に生まれ育ちましたから、6歳になって養育係が当てがわれ、それから10年間指導と監視を受けて育ったと思われまます。その窮屈な日々を回想し、そこから自由にされた日の清々しさを思い出しながら、この記事を書いていたのでしょう。

犯した罪を責められ続けるのは、辛いことです。人から責められることもあれば、自分で自分を責め続けることもあります。私自身も長年苦しんだ経験がありますが、私の心の重荷を取り除いてくれたのは、まさしく主イエスの十字架でした。神の民を律法の束縛から自由にした方は、私という小さな人間の人生にも同じことをしてくださったのです。私はこのことをイメージして、簡単な図を描いてみました。



これが意味するところは、神の救いの歴史の中に私の救いの歴史が位置づけられているということです。そして、両者は相似的な関係にあるのです。私だけではありません。誰であれ、罪の沼に足を取られて生きている人を、主イエスは救い出してくださいます。救いを求め、主イエスを信じるならば、この恵みは無条件に与えられるのです。

【展開】

最後に、律法が果たした役割にふれておきましょう。23 節に「**やがて真実が啓示されるため**」、24 節に「**私たちが真実によって義とされるため**」とあります。「ため」(ὥστε／ホーステ) という接続詞は「so that」「therefore」を意味し、律法がやはり何かの目的に達するために必要であったことを示しています。人の罪を裁くばかりのものとなってしまう律法には、どんな意味があったのか。それは、罪が示されることによって初めて人は救いを求めるようになったということです。「自分には罪はない」と考えている人にどんなに福音を語っても、そもそも救いを必要としていないので暖簾のれんに腕押しとなるでしょう。しかし、神の基準に自分の人生を照らし、その光の下で自分の生き方を見つめるとき、たくさんの埃が見えてくるのです。きれいな部屋に見える。しかし、太陽の光が差し込んでくると、空気中にたくさんの埃が舞っているのに気づくことがあるでしょう。私たちの心の中には、自分でも気づいていない罪がたくさん存在するのです。そして、それを示してくれるのが律法であります。

【結論】

私が音楽科に在籍していた頃、声楽の先生にたびたび言われたことがありました。音楽を解放するためには、楽譜をよく読まなくてはならないと。楽譜に書かれている正しい拍、正しいテンポ、正しい強弱……。作曲者の意図をまずしっかりと聞き取り、再現する作業が必要になります。しかし、そこで終わってしまえば面白みのない演奏になってしまう。その地道な作業を経た上で、自分の演奏を作っていくことができるようになる。楽譜の行間を読み取り、そこに自分の感性を加えていくことができるのです。先生はこのことを「律法からの解放」と呼んでおられました。私たちの人生も、一度は神の法に照らして見つめてみる必要があるでしょう。その上で初めて、それにまったくそぐわぬ生き方をしている自分を救い出してくださいる主イエスの恵みに立つことができるのです。主はまことに私たちを罪から、律法から解放してくださいましたのです。

【祈り】

人の心に、人生の養育係なる律法を据え給う、天の父なる神様。この律法は、聖書を知らなくとも、良心としてすべての人に与えられています。しかし、この曖昧な基準は、聖書のことばによって明確化されました。そして、そのことばによって、人の歩みは計られます。神の高い基準に照らされるとき、私たちは逃げ場を失います。心の奥底までもが光で照らされると、弁解の余地なき自分が明らかにされます。そのような私たちに、あなたは全く異なる道を用意してくださいました。主イエスに依り頼むことにより、この方の義が私たちに移されるのです。この自由なる道を歩み続けたく願います。新しくされたあなたとの関係の内を、生き生きと進んでまいります。

【祝祷】

仰ぎ願わくは、
養育係としての律法を与え、人の生きるべき道を指し示し給うた、父なる神の愛、
律法の要求に耐え得ぬ者に、ご自身の義の衣を着せ給う、主イエス・キリストの恵み、
信じる者の心に宿り、神との生き生きとした関係へと導き給う、聖霊の親しき交わりが、
あなたがた一同の上に、限りなくあらんことを。